

河川伝統技術名称： **なげ**

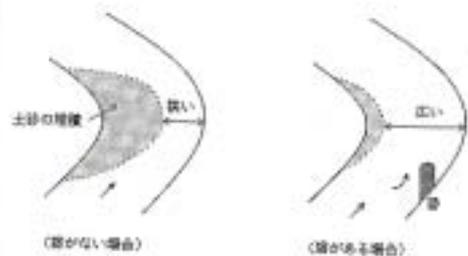
分類：水制 年代：17世紀代

河川名：肱川

都道府県／地先：愛媛県／大洲市



肱川と大洲城となげの位置図



なげの効果イメージ図

資料：建設省大洲工事事務所資料

(概要)「なげ」は、石を積み上げて構築された河川構造物(水制)で、これは大洲地方独特の呼び名である。「なげ」は主に肱川湾曲部の外側に川の流れに対して斜めに設置され、その主な目的は、堀の水深確保、洪水流からの河岸保護、舟運水深確保、船着き場機能等がいわれている。

この「なげ」の由来・設置理由について、文献調査(主に「大洲市誌」)により抜粋する。

「近世までの大洲の歴史は大洲城の歴史であると言っても過言ではない。大洲城(旧大津城)は亀ヶ城・地蔵ヶ嶽城・比地城ともいい、南北朝鮮時代の元弘元年(1331年)宇都宮豊房によって築城されたと言われる。その後、戸田勝隆、藤堂高虎、脇坂安治等が相次いで城主となり、江戸時代に入り、元和3年(1617年)加藤貞泰の居城となって明治に至っている。

大洲市街の構成は、この大洲城の築城に始まると見られており、築城とともに武家屋敷や商家が集まり今の大洲の基となり、江戸時代の加藤家の藩政時代に大きく発展した。特に、大洲藩二代藩主加藤泰興(1611~1677、藩主時代1623~1674年)は、武将としての資質に恵まれ、明敏果断な経世の才をもって、大洲藩をゆるぎないものとした。

一方、泰興は治水事業にも意を尽くし、護岸工事等を積極的に行った。「なげ」が構築されたのも、この泰興の時代である。」